

白金霞

7月号



平成27年7月発行

第53号

白金葎定例会句会案内

八月六日(木) 10:00 ~ 17:00 吟行句会(西新井大師↓炎天寺)

九月十八日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題…芋嵐、衣被きぬかつぎ

十月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 ア第三兼題…愁思、落鮎

月例会句会報 (15 / 7 / 17 7名欠2) (鬼灯市、日

盛) 飯田孝三

篝鵜の舳へさきせかせか舳ふなべりふはは

川花火もいくつ寝たら清の忌

スカイツリー四万六千日の簷

日盛りの喉のどの仏鳴らし乾す

牛蛙線路はつづくどこまでも

増田陽一

杖持ちて振よじれ歩くや日の盛り

鬼灯市人形焼を買ひにけり

夏帽は失ふものぞ遠きデモ

独りみて青芝広く鴉かな

羽搏きて還らぬ時を夏燕

賑ははし越して十年雛燕

日盛や深閑として武家屋敷

四万六千日スカイツリーは雲の中

有難や礎石青苔五重塔(羽黒山)

夏雲雀月山八合目晴れて

光みち

口あけてあけて親待つ燕の子

日盛をジョン万次郎の曾孫来る

日盛や厩は暗く深閑と

重曹と鷹の爪買ふ半夏生

雨傘の中に札出す鬼灯市

吉羽多美子

鬼灯の市下町に粋残り

緑陰に猫の先客ありにけり

緑陰に手話の少年少女かな

十葉のはびこる庭の花明り

校庭に雀二三羽日の盛り

松村幸一

日盛りや足元に影生れけり

青木啓泰

吊忍陶の丹頂羽広げ

ほおずきが宅急便で朝届く

四万六千日の雲霞の一人かな

鉢のままほおずき市より荷が届く

大川も月日も流れ我鬼忌来る

しんがりのゴルフア一人日の盛り

少しほど雷除が邪魔になる

広島忌卵食うなら一口で

日盛りの人の碁を見て浅草に

お茶漬は紀州一ケにて候

武者昭七

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

紫陽花の色の冴えざえと雨あがる

梅雨寒やセーターどこへやったやら

散り敷きてなほ香りけり椎の花

鬼灯は紅と緑の灯を点し

紫陽花が七変化する街の辻

浅野正美

日盛りや蜥蜴走り込む石の下

境内を狭めて賑わう鬼灯市

噴水あび日盛りはじく子らの声

肩ふれあつてご利益願う鬼灯市

3 杖持ちて振^よれ歩くや日の盛り

3 鬼灯市人形焼を買ひにけり

3 四万六千日の雲霞の一人かな

3 日盛や厩は暗く深閑と

3 川花火もいくつ寝たら清の忌

2 ほおずきが宅急便で朝届く

2 賑ははし越して十年雛燕

2 緑陰に猫の先客ありにけり

2 夏帽は失ふものぞ遠きデモ

2 口あけてあけて親待つ燕の子

2 校庭に雀二三羽日の盛り

2 羽搏きて還らぬ時を夏燕

陽一 3

幸一

みち

孝三

啓泰

高志

多美子

陽一

みち

多美子

陽一

2 夏雲雀月山八合目晴れて
 1 紫陽花の色の冴えざえと雨あがる
 1 お茶漬は紀州一ケにて候
 1 日盛をジョン万次郎の曾孫来る
 1 日盛りや足元に影生れけり
 1 日盛りの人の碁を見て浅草に
 1 牛蛙線路はつづくどこまでも
 1 梅雨寒やセーターどこへやったやら
 1 十葉のはびこる庭の花明り
 1 少しほど雷除が邪魔になる
 1 散り敷きてなほ香りけり椎の花
 1 広島忌卵食うなら一口で
 1 四万六千日スカイツリーは雲の中
 1 大川も月日も流れ我鬼鬼来る
 1 スカイツリー四万六千日の簷
 1 鬼灯は紅と緑の灯を点し
 1 日盛や深閑として武家屋敷
 1 簗鵜の舳^{へき}せかせか舳^{ふなり}ふはは
 1 鬼灯の市下町の粋残り
 1 雨傘の中に札出す鬼灯市
 1 日盛りや蜥蜴走り込む石の下
 1 紫陽花が七変化する街の辻
 1 吊忍陶の丹頂羽広げ

高志 高志
 昭七 昭七
 啓泰 啓泰
 多美子 多美子
 幸一 幸一
 昭七 昭七
 啓泰 啓泰
 高志 高志
 幸一 幸一
 孝三 孝三
 昭七 昭七
 高志 高志
 孝三 孝三
 多美子 多美子
 幸一 幸一

鉢のままはおずき市より荷が届く
 境内を狭めて賑わう鬼灯市
 重曹と鷹の爪買ふ半夏生
 噴水あび日盛りはじく子らの声
 緑陰に手話の少年少女かな
 日盛りの喉^{のど}の仏鳴らし乾す
 肩ふれあつて利益願う鬼灯市
 有難や礎石青苔五重塔^(羽黒山)
 しんがりのゴルフアー一人日の盛り
 独りゐて青芝広く鴉かな

啓泰 啓泰
 正美 正美
 多美子 多美子
 孝三 孝三
 正美 正美
 高志 高志
 啓泰 啓泰
 陽一 陽一

一句鑑賞

光成高志ス

カイツリー四万六千日の簷

孝三

この句何回も読んでいたら、これはスカイツリーの設計コンセプトを詠った句なのだと気づきました。東京の下町と一体となるようにつくられた塔である。高い樹をイメージしている。その簷^{のき}をなす展望台から浅草寺の観音様に手を合わせて四万六千日分の功德を授かりますようにと願う場所でもあるのだ。五重塔に登れない庶民はスカイツリーの簷^{のき}からお参りできるのだ。ぐるり回れば富士山も筑波山も運がよければ拝める。東京の街は墓石群に見えるとか、東京砂漠という時代もあった。それらをひつくるめて、四万六千日という縁日の簷となれという願いもこめて。

四万六千日の雲霞の一人かな

幸一

この句、スカイツリーの簷から見た四万六千日参りの善男善女の光景のようだ。雲霞のような人々の一人として私も参りしているのだという認識だ。この日お参りすれば、四万六千日お参りした功德を授かると言うのだから、誰でもお参りしたくなる。四万六千日を年数に直すと百二十六年にもなる。寿命を遥かに超えて子孫にまで及ぶ功德となるではないか。あるいは先の震災で亡くなられた方々の分までまかなってあまりある。私も今年は雲霞の一人としてお参りしました。

日盛や厩は暗く深閑と

みち

陸奥の南部曲屋の厩を想像した。あるいは芭蕉の泊った封人の家の厩を想像した。外は日盛り、誰一人通らぬ村の佇まい。深閑としている。皆昼寝でもしているのだ。日盛りと深閑とは同意の言葉で、使わずに深閑を表現できないかとの意見があった。「暗く」はなくてもいい言葉ではないかと思うが、「深閑と」は描写したかった副詞であり、作者の心もちもこれで表わしかったのだろう。

羽搏きて還らぬ時を夏燕

陽一

夏燕は卵を二回生み雛を二回育てて秋早々に南方ジヤワ島などへ帰っていく。忙しいのだ。羽搏きて羽搏きて餌を取ってきて雛に食わす。そんなに働いても還らぬ時をなぜに燕さんよ、と夏燕に呼びかけている句で

ある。それは作者の自問であり、きつと自答して自足しているのだ。

一句鑑賞

武者昭七

夏帽は失ふものぞ遠きデモ

陽一

日頃愛用していたものを失くしたときの悲しみは大きい。体の一部をもがれたような空虚感がある。咏者はかつて愛用の夏帽子を失った経験が実際にあるのだという。「夏帽は失うものぞ」という語調にはその衝撃と傷心を必死になだめようとする切ない心情がほとばしっている。「あきらめよ我がこころ」というわけである。思えばひとはその時々、あるいは「夏帽」をみずから脱ぎ棄て、あるいは心ならずも失いして生きているのかもしれない。結句「遠きデモ」に青春の残像がある。

羽搏きて還らぬ時を夏燕

陽一

時間は巻き戻すことができない。一旦羽ばたいて過ぎ去った時間はもう二度と返らない。この句のテーマはそういう「時間」である。二度と還らぬものへの哀惜とノスタルジー。ともに内省のまなざしが濃い句である。

日盛や厩は暗く森閑と

みち

句会では「森閑」という用字に議論があった。思うに、「日盛」というのは夏の過酷な日差しと炎熱の中にあって人間の気配も自然の気配も一斉に消え去った一

瞬の神秘な無音の世界をいうのだろう。それを咏者は森閑と表現した。暗く森閑とした厩は遠野物語の世界のように不気味である。

ほおずきが宅急便で朝届く

啓泰

ほおずき市にちなんでの贈り物であろう。本来なら朝早く鉢のまま手に提げて自分で届けに来るはずなのになんと送り主の姿は見えずやつてきたのは宅急便というわけだ。しかし朝届けたというところに送り手の心づかいが見えてうれしい。なんでも便利になり手軽になった現代生活だけれどやさしい配慮はうれしいものだ。

十葉のはびこる庭の花明り

多美子

「十葉」はどくだみで夏の、「花明り」は桜が満開で闇の中でもほんのり明るいことで春の季語。季語のだぶりやちぐはぐさはご法度であるのは先刻ご存知なれど、この句で花明りを桜と読み違える人はあるまい。桜は花だけれど花は桜とは限らない。言葉の縛りは緩い方がいい。

一句鑑賞

増田陽一 大

川も月日も流れ我鬼忌来る

幸一

流れて止まぬ川の水に時の流れを見て嘆く詩は多い。『ミラボー橋の下をセーヌが流れる：月日は流れ、私は残る』のアポリネールが嘆いたのは恋のなりゆき

だったけれど、掲句の『餓鬼忌』で俄然『自ら選んだ死』への嘆きとなる。ここには東京人の芥川に因んだ「隅田川」が、吾妻橋付近から下流への異称とされる「大川」を使うことで、やや抽象化されて韻き、広く死者への追悼の念さへ感じられる。

川花火もいくつ寝たら清の忌

孝三

忌の句が続くけれど、「清」が貼紙絵の作家山下清であることは代表作の主題「川花火」の語で判る、と作者に教わって、成程、と了解した。「もいくつ寝たら」は正月など、親しい行事を待ち望むときの慣用語であったから、掲句には山下清の作品、また飄々とした人柄への親愛が滲む。筆者も山下氏の情景の記憶力と、緻密な表現は素晴らしいと思う。

梅雨寒やセーターどこへやったやら

昭七

今年の梅雨は長く時には本当に寒かった。セーターが見つかからないのは、きちんと仕舞っておいてくれる方が居るからである。僕などはいま一人暮らして、冬からの衣類がまだ積み重なっていて、かき混ぜるとすぐ見つかる。掲句は、梅雨寒に遭って慌ててあちこち探している様子の「どこへやったやら」が良くて、老境とは限らないけれど、そう読めば何だか愛嬌が感じられる。

夏雲雀月山八合目晴れて

高志

出羽三山のひとつ、修験道の名山で湿原や高山植物も多いそうだからさぞ雲雀も上るのであろう。八合目

まで上るのは大変だろう。休憩して汗も冷えた時に夏雲雀を聞く心地よさが出て、「八合目晴れて」の語調が爽やか。

日盛をジョン万次郎の曾孫来る

みち

ジョン中浜万次郎は、若年で漁に出て難破し米国船に救われ十年の教育を受けて帰国、時の幕府が是非必要とした能力を買われて要職につき名を残した人物と聞き、人の運命の不思議を思う。偶然の災厄がまた幸運であり、優れた資質を開花させたわけである。その曾孫というのが居て、ある日講演に來たそうである。伝説のような事件と現在の日常とをリアルに繋ぐのはこの「日盛」の季語の微妙な作用と思う。

緑陰に手話の少年少女かな

多美子

緑の木陰深いところで、少年と少女が話し合っている。手話だから動きは見えるけれど声は全く聞こえない。僕には二人とも白い服装のように見えてきて、緑陰の中のパントマイムが別世界から來たもののようである。有名な三鬼の「緑陰に三人の老婆わらへりき」を「白昼の魔宴サバト」（塚本邦雄）というならば、こちらは天使の情景であるのかも知れない。

一句鑑賞

飯田孝三

雨傘の中に札出す鬼灯市

みち

鬼灯市は、梅雨時とてもよく雨が降る。それが鬼灯を

生き生きさせ、江戸の情緒を添える。今年も雨、だが雲は厚くない、混雑の中、雨を厭いつつお札を取り出す手許が見え、お札の手触りがつたわる。アマガサノナカニサツダスホツキイチ。リズムは明るく、めりはりあり、出だしア音四蓮、アマ「ガ」サの鼻濁音は、傘にかかる雨音にもかよい、ふつと兆しさえ感じさせる。臍は雨傘の「内」ならぬ「中」。鬼灯市の賑いが聞こえる一句である。別に「口あけてあけて親待つ燕の子」、巢に犇く口口を、あつけらかと目に物見せ、く「あけてあけて」の姿がかわいい。初め「親待つ」はいわずも、と思ったが、いやいや、省略もほど合いが大切、心の緒のたよりが句を膨らます。

ほおずきが宅急便で朝届く

啓泰

便利な時代である。宅急便はどこへも、からも、一夜で運ぶ。有り難や鬼灯市参りも手軽で気軽。日頃、多端な啓泰さん、早速一鉢（？）選び、宅送を託す。臍は「朝」、朝ならではの生気を届け、瑞々しい鬼灯が元気をくれるのだ。四角四面の荷を解くと、かな書き「ほおずき」のたたずまいが、艶になつかしい。他に「広島忌卵食うなら一口で」、三鬼句を一呑みする、豪気と哀感が見もの。

賑ははし越して十年雛燕

高志

新居に引っ越して十年、都内ではめつつきり減った燕だが、今年も、軒端の雛が賑わう。やがて巢立ち、秋

にはうち揃って南へ帰る。わが家も子供たちが元気に育ち、巣立ち、それぞれの家庭をもつ。子育てに忙しかった一齣々々が、昨日のように目に浮ぶのである。候鳥わたりどりならぬ人は、熟年二人孤塁を守るが、時に係累うち揃う、また賑ははしからずや。「賑ははし」は富み栄える、寿ぎの謂い。さあ、記紀万葉源氏を溯る、大和ことばの豊饒のたゆたいに包まれよう。諳んじて情懷ふかく、なかんづく「ん」の実感。ところで、臍は「雛燕」。口々に囀す雛燕に、眼前、昔幼子の顔々が重なる。四万六千日の雲霞の一人かな

幸一

軍国少年世代には、「雲霞」の如しは、打ち寄せる敵の軍勢の謂い。一網打尽撃ち伏せる、浅き夢見し大和魂だま。時は変わって、平成樂土、え、穢土？とまれ善男善女蟬集して、廬舍那仏ほとけに跪く、数ならぬ身とな思ひそ、御恵み四囲に普あまねし、この一日、四万六千日祈願の御功德を賜る。比喻は、やつぱり隠喻がいい、直裁簡明、潔し。「かな」に万感、動かない。

鬼灯市人形焼を買ひにけり

境内、折りしも鬼灯市で賑わう。まづは観音様を拝み、名物人形焼を仲見世の老舗に買う、鬼灯の生氣と人形焼の素朴さにふと心癒される。一口、四万六千日のご功德に浴せるかな。鉢植えの鬼灯は、今や町では育て難い、人形焼なら、悦子さんと一緒に召し上がれる。イ音をたたむリズムが屈託なく、人形焼「も」ならぬ「を」

がさわり。さっぱり「けり」の俳諧味がいい。外に「夏帽は失ふものぞ遠きデモ」、帽子はなくし易い、まして夏帽。「遠きデモ」は安保の昔か、溯る皇居前、血のメーデーか。ともに遠い夏、また夏隣る日の出来事。はて「夏帽」は。

俳窓評論纂

*海光

児等よ、今昼は真盛、日もこゝもとに照らしぬ。

寂寞大海の礼拝して、

天津日に捧ぐる香は、

浄まはる潮のにほひ、

轟く波凝、動がぬ岩根、靡く藻よ、

黒金の船の舳先よ、

岬代赭色に、獅子の蹈留れる如く、

足を延たるこゝ、入海のひたおもて

うちさす都のまちは、

煩悶の壁に悩めど、

鏡なす白川は蜘蛛手に流れ、

風のみひとり、たまさぐる、

洞穴口の花の錦や。〈ダンヌンチオー『賛歌』

上田敏「海潮音」より（M38年）

先々月ひろし先生に教えてもらった代赭色の用例が右の詩に出てきました。これで更によくわかりました。

*先月の受贈誌に取り上げた彩123号の句「遅日なほ姉・三・六角・蛸・錦」のひろし先生の句、京都の人には馴染みの京の通り名わらべ唄にある「あねさんろつかくたこにしき」を詠われたものです。姉小路通・三条通・六角通・蛸薬師通 錦小路通の頭文字を・で仕切つて並べたユニークな俳句。彼岸の入り頃の京都は遅日と言つたつてまだ寒いなあという感慨を通りの名を並べて陳べたものでしょう。京都が好きでまた新し物がりやでないと書けない句と思います。

*以下は日本語の良さと日本人の良さの根源を見た思ひをしたので書く。十三日のスタヂオパークに出た歌手のクリスハートのことである。桑港から来ている半黒人歌手だ。日本に帰化して一生住みたいという。いろんな方言がありどこでもいい景色があり、食べ物もいろんなものがある素晴らしい日本にと。高畑淳子さんが「ありがとうございます」と泪して御礼を言っていた。私思うに、日本人の魂がアフリカから大移動した元の人間の魂と合体したのがクリスハートではないか。そういう可能性がまだ日本人には残っている。

*本誌は俳誌交換を四誌と行っています。「彩」「飛行雲」「あすか」それに「東京クラブ」です。(時々啓泰主宰の「亜」を貰います。)夫々、平野ひろし主宰、駿河岳水主宰、山尾かつひろさん、長屋璃子さんから送られてきます。ざあつと速読して、瞬間選句をさせてもらい、二

回三回と読んで受贈誌の欄に掲載しております。スペースが少なくて恐縮しております。前の二誌には受贈誌欄があり、主に主宰の句が紹介されていて、そこに懐かしい名前の方々があるので、必読しております。岳水さんの受贈句誌の数には驚きます。百二十六句を掲載されておられ、季刊とは言え、目を通すだけでも大変な速読だと思われます。敬意を表します。癌などなんのその克服されて旅吟も再会されたようです。

ハガキ句 (52報) 管見

飯田孝三

穴覗く君に目が合ふ嫁が君

高志

「嫁が君」は正月三が日の鼠のこと。その謂れは知らないが、古く、そう呼んだ各地の習俗に由来するようだ。

日頃、忌み嫌われるにしては、名の響きが愛らしい。むべ、その挙動はどこか憎めず、可愛いげがある。古く、鼠は大黒さまの使いとか、各地の昔咄にも、思わぬ財宝を授かる「鼠のお札」が伝わる。「鼠浄土」である。一方、俳諧・俳句の世界では、間々、ほのぼのと色香がただよう夢想境に運んでくれる。

明くる夜もほのかに嬉しよめが君

其角

どこからか日のさす閨や嫁が君

鬼城

ぬば玉の閨かいまみぬ嫁が君

不器男

嫁が君全き姿見らりけり

野口里井

ところで、掲句、穴の向こうにあったのは、宝の山で

も馥郁の帳でもない。夢にまで見た君のつぶらな眼と
出喰わしたのだ。めでたし。巧まず俳諧がこぼれ、新鮮
無垢な感興は常套の官能の境をぬけ、上質である。

綾取りの富士見せに来る四日かな

敏子

綾取りは、昔から伝わる主に女兒が二人でする遊戯。
富士山の形どりはさして難しくないので、五六歳の子
か、相手の手から移した糸で織れた富士山を喜々と見
せにくる。むかえるうち、ばばが愛想をくずす。正月、
一家里帰りでの情景だろう。「富士」がめでたい。子供
の表情が晴れやか、淑気ゆるむ和やかな団欒は蓋し四
日である。「かな」に実感。

初空やひとは願ひぬ太古より

清美流

人は太古より祈り励みそして何を得何を失ったのだ
ろう。
(駄句近作)

予報士の早口三寒四温かな

鬼やらふ鬼のパンツの同じ柄

(平 22・02・05)

お便り広場 (到着順、敬称略)

白金霞六月号拝受致しました。それにしても素晴し
い充実振りですね。『万朶の櫻か襟の色』昭和二十年
は私が旧制中学一年生でした。四月から八月迄毎日こ
の歌を行進しながら歌っていました。上級生は勤労働
員でいませんでした。会社へ入って二年目？位五月一
日のメーデーの時、この曲が聞こえてきました。ビッ

クリしました。「たて万国の労働者」がこの曲でし
た。歌詞だけが異なっていたのですね。またお世話に
なります。
(6/30 小山

陽也)

白金霞六月号をお送り頂き恐縮でございます。いつ
もの事ながら御活躍の幅の広いこと尊敬申し上げます。
旧盆は八月十五日六日のことは承知いたしております。
我家の子たちは盆休みを「自分達のレジャー」に優先し
墓参りはその枠外と相なるわけで、親としてのジツケ
ンができなかった不明を恥じ入りますすわけでございま
す。吟行参加できますればよろしく御願い申し上げます。

(7/3 菊田寛子)

拝啓 夏空に雲の峰がひときわ高く立つころとなり
ました。変わらぬご健勝のこととお喜び申しあげます。

本年五月十八日、美清流は八二年の人生を終え、瞑目
しました。略儀な手紙によるもので大変失礼かと存
じますが、お知らせ申しあげます。(中略) 故人は、松
本より東京へ出てきての学生時代、その後の日本原子
力研究所勤務時代、そして弁護士となり横浜にて開業
した以降も、皆さま方の厚いご交誼に支えられてここ
までまいりましたこと、深く感謝申しあげます。なお、
故人の遺志により、葬儀などは近しい親戚のみで執り
行わせて頂き、昨日、四十九日も滞りなく終えました。
香典等も皆さまにお気遣いなさらないようにとのこと

でしたので、どうぞお心遣いはなさらず、ただ故人への
思いを祈り伝えていただければ幸いです。ここに美清
流への生前のご厚誼を改めて拝謝し、衷心より御礼申
しあげます。敬具

平成二七年七月六日

久保内良江

統 頭

(美清流さんとは孝三さんのご紹介にて、平成八年より八丁堀句会
からずつとハガキ句を通じて俳縁を結んでいました。とくに平成20
年の箱根一泊吟行会は最近のこととして記憶に新しく、本年5月
1日の築地吟行会への案内をしようかな、すまいかなといつも脳裏
をかすめていました。ほんとにいい人であられました。心に残る人は
美清流さんでありました。句会報などで見られる綺麗な教科書体
の文字にて今回もご丁寧な手紙を頂きました。孝三さんと相談の
上、追悼句などを考えたいと思っています。高志)

東京のおぼんで14日坊さんが来宅、13日、15日は迎
え火と送り火と、会費を送るのを忘れました。(17日は
浦和の裁判所へ行きます) 会費同封しました。古代は別便
です。七月〜九月はひまになります。皆様の益々の
御活躍を祈ります。(7・14日 小山陽也)

送信投句お手数さまです。暑中お見舞い申し上げます。

(7・15日 青木啓泰)

日中の暑熱が続き夕日が落ちる頃、やつと暑さがやわ
らく毎日でございますが、お障りなく、ご活躍の御事と

存じあげます。白金蔭お表紙を飾る毎号の変化が楽し
みで、暑さの中、どんな様子かと想像しております。

土日に東京クラブの句会が終りましたが、お盆の墓参
など私ごとで会報発行が遅くなりましたが、ご笑覧下
されば嬉しゅうございます。この年になって聞いたこ
ともなく、見たこともない日本語の奥深さにただ々
瞠目することもあり何か調べたいと思うと辞書やら参
考になりそうな本やらで、身の廻りが散らかり本を読
み、こぢんまりの生活など出来そうなく、時間ばかり過
ぎます。句会の前に読んで兼題にとりくみ、佳い句など
出来ず困ったものでございます。夏も出かけたくも、生
きものが居れば、同じく老令、最後まで大事にしてやり
たいので旅はアキラメです。梅雨も明け近く、暑さもき
びしくなると存じますが、御身おいとい下さいますよ
う。ごきげんよう。

(光成高志様

七月十五日 長屋璃子)

(ご丁寧なお手紙と東京クラブ句会報毎月ありがとうございま
す。これで俳誌交換が軌道に乗りました。最後の璃子様のご様子
私も同様な生活ぶりです。同じように忙しく編集されている「彩」
の不二南麓さんもおられます。どうかお元気でこのまま続けられ
ますよう祈念申し上げます。高志)

先の例会ではお世話になりました。いつもながら新
鮮な野菜を有り難うございます。

妻に渡すささげいんげん緑照り

特集の校正は大幅な訂正加筆で、たいへんご面倒をおかけします。恐縮ですがよろしく御願いたします。梅雨明け、ますます烈日、ご夫妻とも御身ご大切に、健康を祈ります。

(平 27・06・23 飯田孝三)

受贈誌 (H27年7月号)

明易し小綬鶏のこゑ雉のこゑ(彩 123号)

平野ひろし

白南風を招ず大きく北開けて

(〃)

離宮内農道があり春田あり

(〃)

離宮の田すずなはこゝら仏の座(〃)

相田悠紀子

青き踏む無事故の免許返上し(75号)

駿河岳水

爪立ちて覗く園児の花御堂あす(7月号)

山尾かつひろ

蓮咲いて寺に陽気な花嫁御(東京クラブ7月)

武子

猫の墓覆ひて余る茂りかな

(〃)

璃子

水音に傾ぐ岸辺の額の花

(〃)

文男

胡瓜切るラヂオのギター音にのり(〃)

輝子

老鶯や風渡りゆく千枚田

(〃)

〃

恋の歌を読む

三

武者昭七

小竹ささの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹いも思ふ別れ来ぬれば

柿本人麻呂

人麻呂が任地の石見の国に妻を置いて都に上るときの歌として万葉集巻二に見える歌です。笹の葉は山全体がざわざわと鳴るほどにざわめいているけれどこの俺

はひたすら家に置いてきたあいつのことを思いしんでいるというのです。「さや」は目や耳にはつきりとしていたさま。「さやぐ」はざわざわとたちさわぐさま。深い山路を行く人麻呂の耳にきこえるものは風に鳴るささの葉の音だけです。三つ重ねられたサの音が効果をあげています。人麻呂は風に鳴る笹の葉擦れの音になにを聞き取っているのでしょうか。それは身近にカミに寄りつく気配です。古代のひとびとはいつも身辺にカミを意識して生きていました。いたるところにカミを感じとっていました。山にも野にも川にも森にも野原にもカミは宿っていたのです。カミといつても幸いをもたらずだけではありません。カミは時に悪霊となつてひとにひどく当たりちらしました。峠にはサエノカミがいて旅を行く人に捧げものを要求しました。旅に死んだ人は死霊となつて旅人にとりつき衣類や食べ物要求しました。旅に行くことはそういう不安や恐怖に耐えることでした。

人麻呂にそういう力を与えてくれたものは残してきた妻への熱い思いです。置いてきた妻へのおもいの強さが旅の不安から彼を解き放つてくれたのです。「われは妹思ふ・」という妻恋いの詞は実は妻のもとへの無事な帰還への祈りを込めた詞でもあったのです。妻の力が旅の不安を鎮め自分を守ってくれることを古代の旅人は信じていたのです。

(注)「さやぐ」という詞は不穏や不安な状態を意味するのにつかわれた。

・・・瑞穂の国はいたくさやぎてありなり。 古事記

・・・畝傍山木の葉さやぎぬ風吹かんとす

〃

芭蕉の軽み以後(38)

光成高志

梢よりあだに落ちけり蟬の殻 (蟬)

桃青

謡曲「桜川」の「梢よりあだに散りぬる花なれば、落ちてても水のあはれとは」のもじり句である。傍点の言葉をもそのまま用いているが、落ちるものが花でなく蟬の殻としたおかしみがある。梢から高く飛ぶと思いきや、虚しく地上に落ちたのは、蟬そのものではなく蟬の殻であった。「水のあはれ」に「淡^{あは}」をきかせて蟬の「殻」に通わせた。括弧内は桃青がつけた前書。

行雲や犬の駆け尿村時雨 (時雨)

桃青

時おりさあつと時雨を降らせながら、足早に空を通り過ぎて行く雲のふるまいは、まさに犬の駆け尿といった感じである。降っては止み、止んでは降る時雨を犬の駆け尿に見立てて卑俗化した。「犬の駆け尿」は犬が走りながら所々で少しずつ尿を出してゆく習性を云う言葉。少し俗化が強すぎる感じがするが、現代的感想は述べない方がよい。

一時雨礫や降って小石川

桃青

小石川から石礫を連想して、時雨の雨粒を礫に見立てた哲学という名辞的発想から、ほんととは雨粒なのだが、礫とも表現できるとしたのである。ひとしきり降って通りすぎる時雨を一時雨と表現し、名辞的発想から、礫が降って「小石の流れる川」になった。現に小石川村に川があるではないかという重層の寓言が談林風というのであろう。

霜を着て風を敷き寝の捨子哉(霜)

桃青

「きりぎりす鳴くや霜夜の狭筵^{さむしろ}に衣かたしき独りかも寝ん」(新古今集・秋・良経)を踏まえて哀れな捨子を虚構した句。「霜を着て」は「霜夜の狭筵」の転化であり、「風を敷き寝」は「衣かたしき」のもじりである。

源氏物語の真木柱の巻に、髭黒の北の方の歌に、「心さへ空に乱れし雪もよにひとり冴えつる片敷の袖」があり、男女が互いに袖を敷き交して共寝するのに、心まであれこれ迷って千々に乱れた雪の降る中に、独り寝の冷たい片敷の袖でした、という歌から片敷き寝どころか、風を敷いて寝るという風にかこつけた。

片敷を風を敷き寝に譬^{たと}えた。ここが談林風というのである。寒夜の捨子に同情を寄せたというよりも、古歌を借りて大袈裟に表現したところ、悲惨な題材を取り入れ、生活の厳しさが沈潜しているとところが新しいのである。後の「野ざらし紀行」の富士の捨子の前兆をなす句とも見られる。

この年の延宝五年は桃青三十四歳、関口水道工事に関係して多忙の中にも、江戸の俳壇にひしめく職業俳諧師の間に伍して着々と地位を固めていたのであった。

芭蕉の軽み以後 (39)

光成高志

富士の雪盧生が夢を築かせたり (雪)

桃青

謡曲「邯鄲」に盧生が夢に見た楚の王宮のさまを述べて、「東に三十余丈に銀しろがねの山を築かせては、黄金がねの日輪を出だされたり」という詞をきかせて雪の富士の美を言い立てたもじり句。「銀の山」の語を抜き「盧生が夢」で気づかせようとする「抜け」の手法を用いている。「盧生が夢」は、蜀の青年、盧生が、邯鄲の宿で一睡の間に楚の王位に昇り、榮耀榮華の五十を送ると見て夢が覚めたという故事。雪の富士は、盧生が邯鄲の夢に見た銀の山にも比すべき美しさだということである。

白炭やかの浦島が老の箱 (炭)

桃青

そもそも白炭しろずみなるもの、あの浦島太郎が玉手箱を開けて忽ち白髪頭になったようなものだという句である。白炭は、炭焼きの仕上げ段階で窯かまのなかに空気を入れ、ほぼ焼きあがっている炭を約一三〇〇度の高温で燃やし、頃合を見て、真っ赤になった炭を窯口から取り出し、灰と土を混ぜ、水分を含ませた消粉をかぶせてすばやく冷やしながら消すと表面に白い灰がつく

のでその名があるのだが、炭質がかたいので、一般には「カタズミ」ともよばれている。白炭の代表的なものは、ウバメガシからつくられる備長炭である。

浅草 桐蔭の俳号で新井白石の次の句が延宝八年刊行の江戸弁慶に所収されている。

白炭や燐きつねび消て馬の骨 (炭竈)

桐蔭

また、延宝四年秋に、神野忠知が「霜月やあるはなき身の影法師」と辞世して自刃した。年五十二。

白炭や焼かぬ昔の雪の枝

忠知

という句が有名になって、白炭の忠知といわれた武士であった。二人の句と並べてみると、桃青の頭脳の柔軟さがやや優っていると思う。白石の句は、炭を作る竈の中に燐光が消えて累々と馬の骨のような墨が横たわっている様を吾身に喩えて謙遜した意か。忠知の句は、白炭を見ていると、焼く前の昔の木の枝に白雪の積もっている原木を想像させるという白炭の今昔を詠って、吾身になぞらえたのである。桃青の句の玉手箱は白炭の縁語として茶会の炭箱の箱を掛けている。

これまでの桃青の句は、主に内藤風虎主催の『六百番俳諧発句合』に発表されたものである。句合は昔からある歌合に真似て発句で優劣を競うもので、芸術としてよりも、軽い遊戲的なものであった。内藤風虎は奥州岩城平の城主であり、俳諧好きであったため、本拠の岩城に百人ちかい俳士があり、江戸藩邸にも俳諧師が集ま

り、さながら「風虎サロン」の様相を呈していた。二年前の宗因の下江は実は風虎の招きに応じたものであった。江戸俳壇の発展はここから始まる。

芭蕉の軽み以後（40）

光成高志

延宝年間（一六七三〜八二）は、談林俳諧が最盛期を迎えていた。当時の江戸俳壇は、神田蝶々子・岸本調和（ようわ）ら古風の一派を中心として、西山宗因の梅翁流を奉ずる、すくなくとも三派があった。一つは、内藤風虎の江戸藩邸に集まるいわゆる「風虎サロン」のメンバー、一つは、今治藩江戸留守居役江島山水（俳号）らの「夕方」を名乗る一派、いまひとつが田代松意（しょうい）・由比雪柴（せつさい）・野口在色（ざいしき）らの「談林」派であった。在色は、神野忠知について俳諧を学び、江戸俳壇の固陋さに批判的であったので、世務を引退して点業への夢を持っていた松意らと語らい、寛文十三年（一六七三）春、神田鍛冶町の松意草庵を本拠地として俳諧談林派を結成した。談林とは同名の僧徒の学場になぞらえた命名である。延宝三年（一六七五）夏、風虎の招きによって宗因が下江し、風虎邸にあることを知った談林派の人々は、前年大阪を訪れ既に宗因に師礼をとっていた在色との因みにすぎり、これに巻頭の発句を乞い得て十百韻を興行した。すなわち『談林十百韻』がこれである。

されば爰（こゝ）に談林の木あり梅の花

梅翁

眠（ねむり）をさますうぐいひす

雪柴

朝霞たばこの烟よこおれて

在色

談林の木というのは檀林の梅檀木になぞらえ、梅の木をいう。梅の花は京から大宰府まで飛んだという天神の飛梅伝説から、「飛躰（とびてい）」と呼ばれる談林風の木に擬した。さてここに梅の花が馥郁と咲き匂っている。いうならばこの木は談林の園に生い出た木と称すべきであろうという、談林から飛躰、飛梅、梅の木という連想である。千句構成上の約束に従い、春季の句をもつて挨拶した発句である。

脇句は、謡曲の詞を下敷きにして、鶯の声に世間の人々が眠りを覚ますといい、裏に、宗因の挨拶に応えて、その新風が世間俗俳の迷妄を破る意を寓したのである。第三は、鶯に目覚めてまず一服すれば、煙草の煙が横にたなびいて朝霞かと見紛うばかりである。煙草の煙を誇大化して転じたのである。

風虎サロンに集まった若い俳人たちは全て貞門系で高野幽山、小西似春が中心人物であった。季吟門の山口信章・松尾桃青・池西言水らがその周辺にあった。古風な一派、夕方の一派、談林の一派とこの風虎サロンの一派の四つのグループがあつて、江戸俳壇は談林旋風のふきまくる巷と化していた。

我孫子日記

6/19	例会
6/20	鎌倉
6/24	SOA
7/1	SOA
7/5	* 蔵王温泉
7/6	*2 酒田→羽黒山
7/7	*3 月山
7/9	*4 鬼灯市
7/17	例会

* 夏夕焼蔵王の町を明るうす

紅花売る蔵王参道梅雨晴間

*2 緑陰の中に黒塗リ倉庫並ぶ

梅を干す本間家通り川近く

老鶯の一際高く羽黒山

蝸が長鳴きしをり皇子の為

涼しさの芭蕉句碑あり濃あぢさゐ

蜂子杜の前に膝つく草刈夫

鳥居出で斎田今は青田中

*3 池塘遠近ニツコウキスゲ黄の点々

老鶯の語尾のちよん切れ八号目

月山に池塘のありて蛙鳴く

*4 鬼灯市小さい小さい黍団子

鬼灯市一鉢二千五百円

雨の中鉢に水掛く鬼灯市

お手玉の如き鬼灯籠に売る

編集後記…自分の尻を叩く積りで、軽み以後を三篇入れて所定の頁に収めました。五周年記念号の準備を始めました。

白金葎 第53号 平成27年7月発行
編集・発行人 光成高志 (Tel & Fax 04・7187・1068)
発行所 〒270・1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字…加納綾女。写真 7月22日の白金葎